

PRESS RELEASE

2027.1.9sat.-2.21sun.

開館50周年記念
生誕130年

東郷青児展

恋する、
モダン。



The 50th Year of the Sompo Museum of Art
The 130th Anniversary of the Birth of Togo Seiji: A Retrospective



SOMPO美術館

東郷青児の魅力を再発見。 前衛的な作品から、モダンな本の装幀まで。

SOMPO美術館の開館50周年を記念し、当館の設立に深く関わった画家・東郷青児（1897-1978）の回顧展を開催いたします。東郷は、時代を先駆けるモダンで優美な女性像を描いた絵画で一世を風靡しました。しかし同時に、「洋画家」という枠に収まらない多彩な才能の持ち主でもあり、多くの商業デザインを手がけ、当館の母体企業である東京火災、安田火災（現：損害保険ジャパン）に保険案内リーフレットやポスターの原画を提供しました。また、当館は1976年に「東郷青児美術館」の名称で開館した際、東郷から作品の提供を受けており、その後のご遺族からの寄贈も含め、現在では国内最大の東郷青児コレクションを有しています。

本展では、《望郷》などの代表作をはじめ、未来派やキュビズムを取り入れた初期の前衛的な作品から晩年の大型作品まで、過去最大級となる約100点の絵画を一挙公開します。さらに、モダンなセンスが光る本の装幀や挿絵、かわいらしいお菓子のパッケージなど、関連資料約100点もあわせて展示します。

絵画から商業美術まで、時代を軽やかに駆け抜けた東郷青児。その知られざる全貌と色あせない魅力を「再発見」する展覧会です。



広報用画像1

東郷青児肖像写真

SOMPO美術館

© Sompo Museum of Art, 26010

Togo Seiji

東郷青児（1897-1978）

鹿児島県に生まれ、幼少期に東京へ移る。本名は鉄春。1915年、18歳のときに東郷青児の名で初個展を開催し、未来派やキュビズムを思わせる前衛的な作品で注目を集めた。翌年の第3回二科展では初入選にして二科賞を受賞する。

1921年から約7年間フランスに滞在。ピカソやイタリア未来派のマリネッティらと交流するが、次第に理論重視の前衛運動から離れ、古典美術への関心を高める。また、壁画や装飾美術の制作に携わったことで、一般市民が享受できる大衆美術の重要性に開眼した。

帰国後は二科展を拠点に、パリで親交のあった藤田嗣治らと活動。当時は絵画制作のみでの生活が難しく、企業の広告部などで働きながら雑誌への寄稿や挿絵も手がけた。この過程で作風は変化し、滑らかな筆致と陰影で優美な女性像を描く独自のスタイルを確立。書籍の装幀や商業美術にも広く展開されたその作品は、「東郷様式」または「青児美人」と呼ばれ、大衆の圧倒的な支持を得た。

戦後は二科会の再興にいち早く着手し、運営の主導的立場に立って海外交流や新部会の設立など活動の幅を広げた。晩年には中東や南米など世界各地を歴訪し、現地の風土、文化に触発された落ち着いた色調の大型作品を描き始めるなど、生涯にわたり制作の意欲を燃やし続けた。

1978年に急逝。前衛芸術から出発し、広く親しまれる美を志向しながら、昭和の美術界を力強く牽引した巨匠である。

1 当館での東郷青児展の中で過去最大規模

SOMPO美術館の開館50周年、および東郷青児の生誕130年を記念し、東京で7年ぶりとなる個展を開催します。多くの方から寄せられた「東郷青児の絵を見たい」という声にお応えし、当館で開催する東郷青児展としては過去最大数を展示します。

2 SOMPO美術館の収蔵作品をまとめてご紹介

本展は当館の収蔵する作品と関連資料に特化したラインナップです。東郷は東京火災、安田火災（現・損害保険ジャパン）の保険案内リーフレットや販促用のカレンダー、扇子や風呂敷などに多くの原画を提供しました。それらのグッズを通して、多くの方々の目に触れた東郷の代表的作品の数々をご覧ください。

3 商業デザインの分野での活躍

東郷は絵画以外の分野でも幅広く活動し、商業デザインにもその才能を発揮しました。昭和30年代には、多くの和洋菓子店のパッケージ、包装紙やクッキーの缶などに東郷による愛らしい女性の絵が使われていました。また、雑誌の表紙絵を多数描き、モダンな意匠による書籍の装幀も手がけました。

1章 初期：ヨーロッパ前衛芸術の探究

2章 円熟期： 「青児美人」、あるいは「東郷様式」

3章 他分野での活躍： 書籍の装幀、文筆活動、商業デザイン

コラム 素描の情趣： 人物の佇まいと街の情景

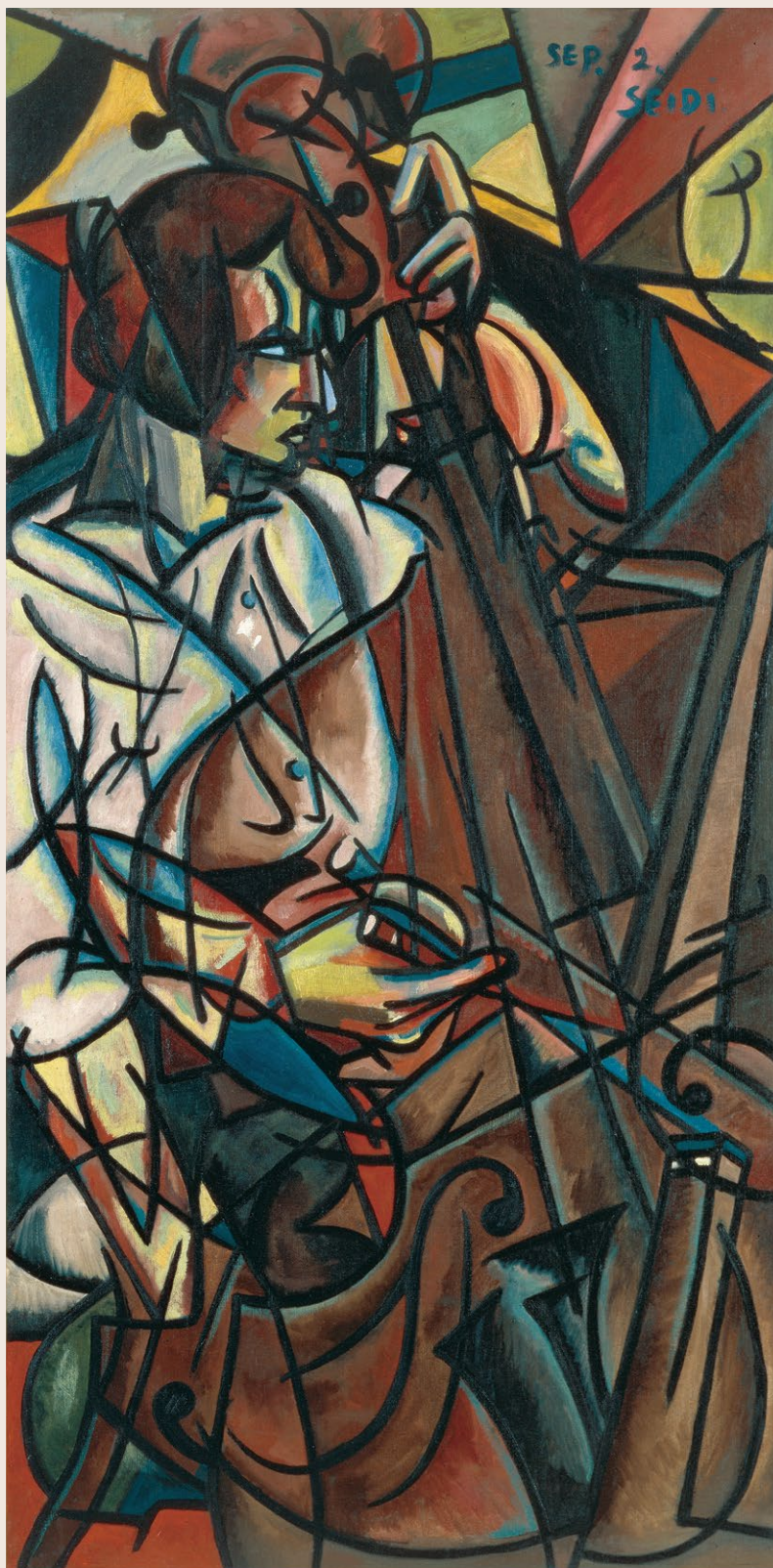
4章 晩年： 遠い国々からのインスピレーション

1章 初期・ヨーロッパ前衛芸術の探究

1897年、鹿児島に生まれ、幼いころに家族と東京に移った東郷青児は、文学や音楽、絵画に触れて育った。当時最先端のヨーロッパ前衛芸術に傾倒し、1915年、18歳で初個展を開催した際には未来派やキュビズムの作風を取り入れた作品を展示。翌年には画家・有島生馬の勧めで公募美術展である二科展に出品し、初入選および二科賞受賞により、新進気鋭の画家として関心を呼んだ。

1921年、24歳で留学を目的にパリに渡り、短期間イタリア未来派の活動に関わったほか、パブロ・ピカソらの前衛芸術家たちや現地の日本人画家たちと交流しつつ制作活動を行った。次第に、前衛芸術運動に違和感を覚え、ルーヴル美術館でイタリア・ルネサンス美術など過去の傑作に学んだという。

滞欧中、東郷は、当時ヨーロッパで広まっていた「秩序への回帰」という芸術的潮流を反映して簡潔な形体を緩やかな陰影表現で描くようになった。帰国直後の1929年、二科展にシュルレアリスム風の作品を出品し、同世代の古賀春江や阿部金剛たちとともに「新傾向の画家」として注目を集めた。



広報用画像2

東郷青児《コントラバスを弾く》

1915年 油彩／カンヴァス 153.0 × 75.4cm
SOMPO美術館
© Sompo Museum of Art, 26010

東郷青児はコントラバス奏者の原田潤と知り合い、その縁からドイツ留学から戻ったばかりの山田耕筰(当時：耕作)と出会った。山田は東京フィルハーモニー会管弦楽部の指揮者を務めており、練習場所の一角をアトリエとして東郷に提供した。当時、東郷は未来派やキュビズムなどの前衛芸術に傾倒しており、音楽の響く環境で、色彩の交響楽ともいえる絵画を描こうとした。1915年、山田の勧めで開催した初の個展で、本作を含む21点を発表した東郷は新進画家として注目を集めた。



広報用画像3

東郷青児《超現実派の散歩》

1929年 油彩／カンヴァス 64.0 × 48.2cm SOMPO美術館 © Sompo Museum of Art, 26010

東郷は7年間の滞仏生活を終えて帰国した直後、1929年の第16回二科展に《Déclaration(超現実派風の散歩)》というタイトルで本作を出品し、同じくシュルレアリスムを思わせる作品を発表した古賀春江や阿部金剛らとともに「新傾向」の画家として関心を集めた。翌1930年、美術雑誌『アトリエ』『超現実主義研究号』の誌上で、東郷は「超現実派の散歩とは、散歩のつもりで超現実主義の試運転をやった意味である」と述べている。ここには、超現実主義や「新傾向」というラベリングから一定の距離をとろうとする意図が現れている。東郷は次第に独自の作風を確立していく。

2章

円熟期：「青児美人」、あるいは「東郷様式」

1928年の帰国後、東郷は新しい絵画表現を模索し、シュルレアリスムを思わせる作品を描いていた。しかし、画家・藤田嗣治との壁画の共同制作や女性雑誌の表紙絵、名士の肖像画の依頼に取り組むなかで、より現実に即した表現に移行し、大型の作品においても、より親しみやすい表現で優美な女性像を描くようになる。1930年代後半にかけては、絵画制作のみで生計を立てることが難しく、女性関係の問題や心中未遂事件も重なった時期ではあるが、この間にも独自の美人画といえる作風に近づいていった。東郷の女性像は、哀愁を感じさせるまなざし、滑らかな肌の質感、曲線的な身体といった特徴をもつことから、かつて一世を風靡した竹久夢二の「夢二式美人」に倣って「青児美人」、あるいは「東郷様式」と呼ばれた。

東郷は、一部のエリート層だけではなく、一般大衆の生活にも美を浸透させようと努め、多くの人々を感化する美の形を追求した。初期に未来派やキュビズムなど前衛芸術を学んで養ったモダンな感性に、常に新しい文化やファッションを取り入れることで時代の先端を行く女性像を作り上げたといえる。



広報用画像4

東郷青児《望郷》

1959年 油彩／カンヴァス 116.1 × 90.7cm SOMPO美術館 © Sompo Museum of Art, 26010

毎日新聞社が主催する第5回日本国際美術展で一般来場者の投票による大衆賞を受賞した作品。同展で大衆賞が設置されたのは第4回、第5回のみだが、東郷は1957年の第4回展でも受賞しており、一般での人気の高さを示している。目を伏せた女性の表情や、しなやかな曲線美を示す肢体は、高度に理想化された「東郷様式」の女性像の典型である。滑らかな絵肌と、落ち着いた色彩による描写という点でも、本作は円熟期の代表作のひとつといえる。



広報用画像5

東郷青児《黒い手袋》

1933年 油彩／カンヴァス 119.2 × 68.2cm SOMPO美術館
© Sompo Museum of Art, 26010

1934年に東京火災（現・損保ジャパン）の火災保険案内の表紙に使用された作品。モデルは作家の宇野千代とされている。1928年にフランスから帰国した東郷は、翌年交際中の女性と心中を企て、未遂に終わったものの大きく報道された。宇野は新聞小説の題材とするため東郷に取材を申し込み、その縁から数年間生活をともにした。東郷と宇野は下北沢に新築したアトリエ付きの住宅に引越し、その建築費用を捻出するために、宇野は東郷の作品を自ら売りに各地へ出向いたという。



広報用画像6

東郷青児《微風》

1937年 油彩／カンヴァス 115.0 × 78.0cm SOMPO美術館
© Sompo Museum of Art, 26010

1930年代後半から1940年代初めにかけて、東郷は円形のカンヴァスを使った作品を多く制作しており、この形状から室内に展示する上での装飾性を強く意識していたことがわかる。また、本作では風になびくピンク色のショールが軽やかさを演出し、白いドレス姿の女性の無垢な愛らしさを引き立てている。東郷は牧歌的な伝統衣装から都会的で洗練されたファッションまで西洋風の装いを巧みに取り入れることで、西洋文化への憧憬を体現するような女性像を描いて人気を博した。

3章

他分野での活躍…書籍の装幀、文筆活動、商業デザイン

東郷は学生時代から絵画のほかに、文学、音楽など芸術諸般に広く関心を抱き、執筆した文章や挿絵を文学雑誌などに寄稿していた。フランスから帰国した後は、画家として活動する一方、生活難をきっかけに多くの書籍の装幀、小説や随筆の寄稿、外国文学の翻訳などを手がけた。1929年、東郷は意中の女性と心中を図ったのち『婦人公論』に手記を寄稿したほか、この心中未遂事件について作家の宇野千代が取材に訪れたのをきっかけに関係が深まり、宇野の著書の装幀や創刊誌のロゴデザインを手がけている。

また、東郷はフランスでデパートの装飾美術部に勤務した経験を持ち、国内でも企業の広告部に勤めるなど、商業デザインにも関わっている。1930年代前半には、東京火災が保険案内パンフレットやポスターなどに、後身の安田火災は毎年顧客に配布するカレンダーに東郷の作品を使っていた。加えて、1950年代頃には全国各地の和洋菓子店で東郷による愛らしい女性の絵をあしらった包装紙やクッキー缶などが使用され、幅広い年齢層に「東郷様式」が浸透するようになった。

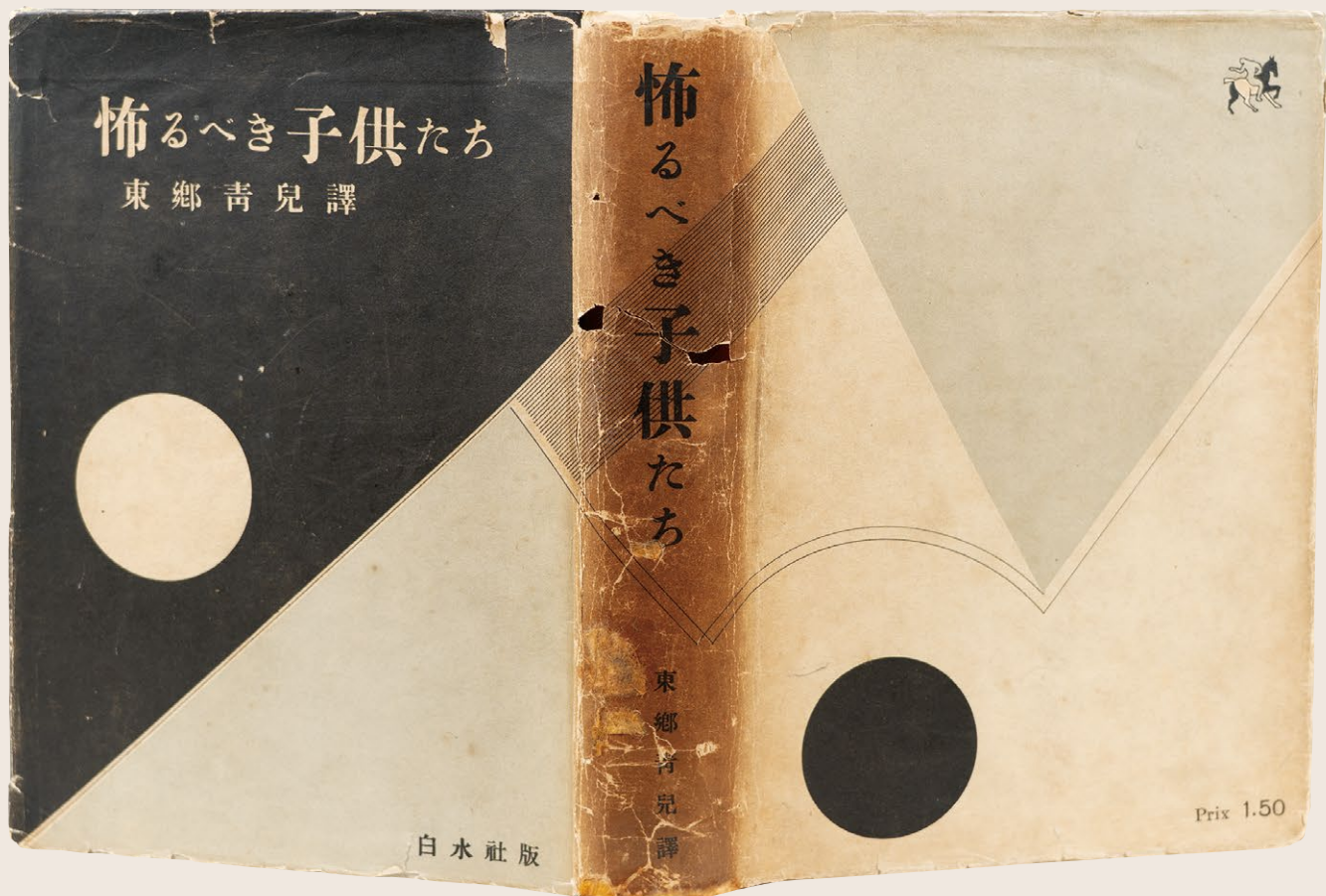


広報用画像7

東郷青児(原画)「株式会社成城アルプス 包装紙」

制作年不詳 印刷/紙 SOMPO美術館 © Sompo Museum of Art, 26010

東郷青児の描く清楚で愛らしい女性像は、1950年代以降に数々の和洋菓子店の包装紙や紙箱、缶などのパッケージに使用され、それらの原画や大型の壁画が店舗内の装飾として展示される例が各地で見られるようになった。人気の洋菓子店の成城アルプスでは、水彩で描いたパリの風景と女性像をあしらった青い包装紙と紙箱が使用されており、店内の販売、喫茶スペースにも東郷の作品が飾られている。



広報用画像8

ジャン・コクトー著、東郷青児訳／東郷青児(装幀、挿絵)『恐怖すべき子供たち』

白水社 1930年 SOMPO美術館 © Sompo Museum of Art, 26010

フランスから帰国した後、東郷は絵だけで十分な収入を得ることができず、挿絵と文章の寄稿、翻訳、装幀などを多く手がけた。フランス人作家ジャン・コクトーの著作『恐怖すべき子供たち』では翻訳と装幀、挿絵を担当し、1930年に第1刷10,000部が白水社から出版された。東郷による全ページ大の挿絵12点は、この非現実的ともいえる物語の登場人物を簡潔にかわいらしく描いたもので、白い用紙の本文とは異なり薄いグレーの用紙に印刷されている。東郷は主人公たちに自身の姿を見出すほどに共感し、感動したことが翻訳の原動力になったとして、「玲瓏たる1篇の詩だ。^{ポエジイドロマン}詩小説のもっとも傑出した一つだ」と賞賛している。



広報用画像9

宇野千代著／東郷青児(装幀)

『^{けし}栗はなぜ紅い』

中央公論社 1930年 SOMPO美術館
© Sompo Museum of Art, 26010

宇野千代が1929年から1930年にかけて「報知新聞」に連載した同名の小説をまとめたもので、東郷が装幀を手がけた。別の作家による新聞連載時の挿絵は含まず、東郷による全ページ大の挿絵一枚が入っている。本小説中でガス中毒の場面で執筆するため、宇野は当時、心中未遂事件で注目を集めていた東郷のもとに取材に訪れ、それを機に約4年間におよぶ二人の同棲生活が始まった。1931年には、宇野の短編集『大人の絵本』が東郷による装幀と挿絵による豪華限定版で刊行され、その後も東郷は宇野の書籍等の出版に関わった。

左：本体表紙、右：外面

東郷は紙に鉛筆、コンテ、水彩などで描いたスケッチを多く残しており、それらは油彩の丁寧に作り上げた画面とは異なり、みずみずしい即興的な表現による特有の魅力をもっている。実際の人物をモデルに制作したものは、迷いのない線描でその表情を簡潔に表しており、その人物のまとう雰囲気まで写し取っている。一方で、手や顔を大きくデフォルメし、身体を抽象的な形体としてとらえたスケッチには、モダンアートへの関心が反映されており、このような表現は晩年に東郷が制作した彫刻にも共通して現れている。

東郷は後年、なじみのあるヨーロッパを越えて、南米や中東など世界各地を旅し、街の情景や人々の姿を手際のよい筆致でスケッチに残している。とくに水彩スケッチでは、のびやかで自由な鉛筆の線と明るく透明感のある水彩による色彩が際立っているが、これは晩年に新たに試みた油彩の表現とも通じる。東郷のスケッチは写実性よりも、その場の一瞬の情景をとらえることを目的としつつ、幅広い表現上の可能性を示すものでもあった。



広報用画像10

東郷青児《モンタルバンの古城》

1962年 コンテ・水彩／紙 32.0 × 23.0cm SOMPO美術館 © Sompo Museum of Art, 26010

南仏ニースにあるモンタルバン城塞は16世紀中ごろに建造された歴史的建造物で、かつては軍港だった美しい入り江を見はるかす丘の上にある。ここからほど近いヴィルフランシュ＝シュル＝メールに東郷の友人の別荘があり、本作を描いた当時、毎年のように訪れて安らぎのひとときを過ごした。東郷はこの入り江を南仏第一の美しい海と呼び、周辺の風景をさわやかな色彩でとらえたスケッチを残している。

4章 晩年…遠い国々からのインスピレーション

東郷はフランス留学時代にヨーロッパ各地を訪れたが、帰国後は経済的、社会的理由により海外へ出るとは稀となっていた。しかし、1961年に二科会会長・理事となった東郷は、海外の芸術家団体との交流を促進し、パリを皮切りに国際交流展に際して現地を訪問するようになった。1967年、70歳のときには、アラブ地方とヨーロッパを巡る旅を敢行。数か月後の二科展に、中東の民族衣装をまとった人物を描いた《モロッコの娘》、《赤い砂》など3作品を出品した。これを契機に、東郷はエジプトやアルジェリアなどの中東・北アフリカ地域をはじめ、南米などヨーロッパ以外の国々へも繰り返し足を延ばすようになる。旅先で現地の人々の暮らしや歴史、文化、大自然に触れることで、東郷は新たな創作のインスピレーションを得た。とくに古代遺跡で目にした大規模な彫刻や壁画に強く感化され、その画風は大きな変化を遂げた。カンヴァスは大型化し、色彩は砂色を基調にモノトーンに近づいた。そして人物や建築などのモチーフを抽象化し、大胆に配置するスタイルに至るのである。



広報用画像11

東郷青児《モロッコの娘》

1967年 油彩／カンヴァス 127.7×86.5cm SOMPO美術館 © Sompo Museum of Art, 26010

1967年5月から7月にかけてアラブ地域とヨーロッパを旅した東郷は、両者の間に位置するモロッコの最大都市であるカサブランカを訪れた。晴れ着姿のモロッコ人の少女に出会い、その華麗な美しさに驚いたと述べている。女性はヴェールで顔を覆うのが習慣ではあるものの、その少女は特別に顔を見せてくれたという。同年9月の二科展には本作に加えて、ヴェールをまとったアラブ人の男性像など、旅で着想を得た人物画3点を出品した。



広報用画像12

東郷青児《王家の谷》

1973年 油彩／カンヴァス 226.7 × 144.4cm SOMPO美術館
© Sompo Museum of Art, 26010

1973年4月、東郷はエジプト各地を旅し、かつて古代都市テーベのあったルクソールを訪れた。ここには数多くの遺跡が残り、ナイル川西岸の山間にある王家の谷は、ツタンカーメン墓を含む新王国時代の王墓24基を含む岩窟墓群を擁している。本作は裸婦を描いているものの、その頭部の形はミイラのマスクを連想させ、背景は遺構の岩壁のようにも見える。旅から戻った東郷は、同年9月の第58回二科展に本作を出品した。

広報用画像13

東郷青児《タッシリ》

1974年 油彩／カンヴァス 226.5×181.5cm SOMPO美術館
© Sompo Museum of Art, 26010

北アフリカの国アルジェリアの南東部にあるサハラ砂漠にタッシリ・ナジェールと呼ばれる台地があり、そこには紀元前6000年に遡る先史時代の岩面壁画が1万5000点以上残されている。1960年代後半以降、東郷はたびたびサハラ地方を訪れており、本作を描いた1974年、77歳を迎える東郷は、遊牧民のトゥアレグ族のガイドとテント生活をし、多くの動物や人物を線刻と描画で表したタッシリ・ナジェールの壁画を取材している。



ギャラリー★で★トーク・アート〈要申込〉

2027年2月15日(月) 14:00-16:00

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話しをしてみませんか? 作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話しながら楽しむ参加型の作品鑑賞会です

定員 50名(先着順)
 申込方法 web申込/2027年1月8日(金)10:00より美術館ホームページにて受付開始
 参加費 1,600円(税込)
 ※高校生以下無料
 ※ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

その他のイベントを開催する場合はホームページで詳細をご案内します

収蔵品コーナー

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》

開館50周年記念

生誕130年 東郷青児展

The 50th Year of the Sompo Museum of Art

The 130th Anniversary of the Birth of Togo Seiji: A Retrospective

会期 2027年1月9日(土)–2月21日(日)
 会場 SOMPO美術館
 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 新宿駅西口より徒歩5分
 休館日 月曜日(ただし1月11日は開館)、1月12日
 開館時間 10:00–18:00(金曜日は20:00まで) ※最終入場は閉館30分前まで
 主催 SOMPO美術館、読売新聞社
 特別協賛 SOMPOホールディングス
 特別協力 損保ジャパン
 後援 新宿区、公益社団法人二科会

観覧料 (税込)
 年齢は入場時点
 一般(26歳以上) / 事前購入券1,500円、当日券1,600円
 25歳以下 / 事前購入券1,000円、当日券1,100円
 高校生以下無料

身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳(ミライロIDも可)をご提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳をご提示の方はご本人のみ無料
 ※25歳以下の方は入場時に生年月日が確認できるものをご提示ください
 ※事前購入券は2026年12月9日(水) 10:00から販売開始
 ※購入方法の詳細は美術館ホームページをご確認ください



SOMPO美術館

お問合せ: 050-5541-8600(ハローダイヤル)
<https://www.sompo-museum.org/>

プレスお問合せ: 「東郷青児展」広報事務局(ウインダム内)

e-mail sompo-m-pr@windam.co.jp

TEL. 03-6661-9447 FAX. 03-3664-3833

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11 鴨下ビル2階